

二〇一四年度 多摩大学目黒中学校 入学試験問題

国語

注意事項

- 1 印刷の読みづらいところがあった場合は、だまって手をあげて先生の指示を待つて下さい。
- 2 問題は三ページ～一七ページまであります。
- 3 受験番号と氏名を、解答用紙に正確に記入して下さい。
- 4 解答はすべて解答用紙に記入して下さい。
- 5 解答用紙は、試験終了時に先生の指示にしたがって提出して下さい。
- 6 問題用紙は持ち帰って下さい。
- 7 句読点、「」も一字と数えます。

一、次の①～⑩の——線部について、カタカナを漢字に、漢字をひらがなに改めなさい。

- ① サッカーの試合をエイセイ放送で見る。 ② おこづかいのキンガクを調べる。 ③ 彼はサカダちが上手だ。
 ④ 会社をケイエイする。 ⑤ 器具をテンケンする。 ⑥ 太平洋沿岸の漁業。 ⑦ 貴重な体験をする。
 ⑧ 彼はとても度胸がある。 ⑨ 鉄鋼業の盛んな町。 ⑩ 雨による土砂くずれがおきる。

二、次の①～⑤の語句の対義語として最も適当な語をそれぞれ次の1～8より選び、番号で答えなさい。ただし、同じものを二度以上用いてはいけません。

- ① 具体 ② 原因 ③ 安全 ④ 増加 ⑤ 移動
 1、減少 2、固定 3、供給 4、権利 5、抽象 6、結果 7、危険 8、現象

三、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(ただし、作問上の都合で本文を一部改変した箇所があります。)

海に近い土地は、冬が長い。二月の終わりになっても、(A)冬に浸ちようこうっていて、春が来る兆候はどこにもない。暗い空。暗い海。時々、雪が降って辺りを白く埋めてしまう以外は、変化がない。

同じ景色が続くせいで(B)見過みごしてしまいそうだけど、着々と文芸部は幕を閉じつつあった。最後の作業である主張大会用の文章も仕上がった。川端康成と山本周五郎の作品について、調べたことが論じてある。何回も推敲いけんして、よい出来だ。

文芸部の終わりを決めるのは自分達だった。体育会系のクラブは夏の試合が終わればそれで終わり。自分達の希望がどうであれ、夏で三年生は引退する。久々に体育会系の部活をへⅠ。

終わりを決める作業は困難だ。垣内君がいなくなれば、とりあえず文芸部は無くなってしまふ。それが気がかりなのか、垣内君はなかなかクラブ引退を申し出なかった。文化系クラブは三年生も卒業近くまで活動することが多いが、文芸部は引き延ばしすぎた。もう、書くべき文章もないし、主張大会の作文も a の打ち所がなくなった。私も垣内君もそれがわかっていながら、ぐだぐだと図書室で過ごしていた。すでに整えられた図書室の片づけをしたり、小さな文章を書いたり、文学者についてちよつと語ってみたり。お互いが終わらなければとわかつているのに、終わるべき時がちゃんと来ているのに、文芸部は終了しなかった。誰かがちゃんと終了だと示さなければ幕は下りない。放っておいたら、永遠に続いてしまふ。きっと、私が決めるべきなのだろう。二日続いた雪が止み、厚い雲の向こうに太陽の光がほんの少しうかがえる。そんな木曜日の放課後、私は切り出した。

「もうそろそろだね」

私の言葉に垣内君は（C）と頷いた。

「そうですね。明日で終わりにしましょうか」

「そうだね。それがいいかも。なんか、あつという間だったね」

「ええ。へⅡですね。でも楽しかったです」

「うん。面白かった。私、ちよつと読書家になったしね。川端に漱石に……。こうして考えると、文学作品ばかり読んじやったな。賢くなったかな。でも、一番面白かったのは、垣内君の書いた売れない詩だね」

私がそう言うのと、垣内君は照れくさそうに笑った。

「そう言えば、結局、部活動費あんまり使わなかったね。余らせすぎたねえ。もったいないことしちゃった」

結局、クーラーも買わず、部活動費は例年どおり、印刷用紙や原稿用紙に変わった。けども、二人で七千円は使い切れず、半分以上が残ってしまった。

「こんなことなら、クーラー買えばよかったですね」

垣内君が言った。

文芸部最後の日、私がクラブに向かうと、まだ二月だというのに、図書室の窓は開け放たれ、ストーブも消されていた。

「何なの？ 寒いんだけど」

「先生ってスポーツしないんですか？」

垣内君は私の質問には答えず、そう言った。

「どうして？ する時はするけど」

私は寒さで歯をがちがさせながら答えた。

「じゃあ、どうして文芸部にいるんですか？」

どうして彼がいまさらそんな質問をするのかわからなかった。

「そりゃあ、仕事だから」

そう、仕事だからだ。もし希望が通るなら、私はバレー部の顧問になっていた。少なくとも、スポーツ系のクラブを持っていた。でも、今は他にもいろいろ理由がある気がする。職員会議で決まって顧問になった。でも、今はそれだけではない気がする。垣内君が文芸部にいるのが、サッカーでしくじっただけではないように。

「先生、走りませんか？」

「へ？」

「走りましょう」

「今から？ 何のために？」

「健全な人間は走らないと」

「何それ」

「大人でも健全なら走らないと」

垣内君が繰り返した。

「はあ？」

垣内君の言いたいことの意図がわからなくて、私はへⅢへ。

「走らないとって思っんですけど」

垣内君は同じ言葉を丁寧と言った。

「嫌よ。寒いもん」

「走れば暖かくなります。走りましょう」

「どうして、最後の部活でそんなことしなさいいけないのよ」

「最後の部活だからですよ。とにかく走りましょう」

「もう一回同じこと言ったら……」

私がそう言つと、垣内君はにっこり笑った。

「走りましょう」

垣内君のその声をスタートに、私達は一斉に図書室から飛び出した。階段を落ちるように走り降り、グラウンドに飛び出した。そう、飛び出した。^{注せき}堰を切ったように図書室から。

ランニング中の野球部や百メートルダッシュをしている陸上部の間をぬって私達はグラウンドを縦横無尽に走った。軽く流したり、時々思い出したみたいに全速力で走ったり、二人で競い合ったり、寄り添うように協力して走ったり、むやみやたらに走った。トラックどおりに走ったり、直線コースを走ったり、**b 秩序**も節操もなく走った。バレーやサッカーのトレーニングで走っているわけじゃないから、疲れようと身体に負担がかろうとどうでもよかった。まして陸上練習じゃないから、フォームもタイムも関係なかった。ただ走る。しんどくなったら緩めて、飽きてきたらいい加減に。

走り幅跳びの順番を待ってる陸上部の生徒が^{iv}怪訝^{けげん}な顔をして見てる。「何やってるの？」ってサッカー部員の声がある。でも、何も気にならなかった。学生服の垣内君とスカートの私は気の済むまで好き勝手に走った。

考えてみたら、こんな風に走ったのは初めてだった。私は走る時はいつも目的意識を持っていた。バレーで生かせるように、持久力が付くように。そう考えて真剣に走っていた。グラウンドの土は雪が解けて二日も経つのに、まだ水分を含んで柔らかい。靴はすっかり泥で茶色くなってしまうている。

息をあえがせながら、玄関のマットで靴の底をぬぐうと、私達は最後に猛ダッシュして階段を駆け上り図書室へ戻った。

「ああ、やばい。ひざが笑ってる」

私達は図書室にたどり着くと、そのまま床に仰向けにひっくり返った。汗が一気に噴き出す。

「なんだこれは」

「なんなんでしょうね」

私達はそう言つて、^①天井を見上げたまま吹き出した。

「いやあ、ひざも笑ってるし、私も笑ってるし、体中が笑ってるし」

私はそれだけのことを言うのに、息が苦しくて恐ろしく時間がかって、それがまた笑いをそそった。垣内君も珍しく声を立てて笑った。

「あれ、これって青春？」

「どうやらそうですね」

精神と肉体が同じ方向に同じ分量だけ動かされている。頭も身体も同じように爽快そうかいに疲れて、同じような快感を感じていた。バレーボールに夢中だった頃、無我夢中になれる自分自身に青春を感じていた。今は我を忘れていない。思いつきり自分を感
じて汗を流している。

「そうだ。実は部活動費でサイダーを買ったんです。飲みましょう」

「へ？」

垣内君は注おもむろに起きあがると、図書室のカウンターの引き出しから缶を二つ出してきた。

「こんなものいつ買ったの？」

「昨日買って、朝図書室に来て（D）忍ばせておいたんです。誰にも見つからなくてよかった」

「すごいね」

「実は僕は、ワルだから」

垣内君が笑った。

サイダーは冬のおかげでまだとても冷たかった。私は炭酸飲料は苦手だったけど、おいしかった。炭酸が、走って熱くなつた身体を急激に冷やしてくれた。

「本当は夏に買ったかったんです。先生がクーラーを買えって注ごねてた頃に。炭酸飲めば、一瞬だけと涼しくなるだろうから」

「人聞きが悪いわね。別にごねてなんかないわよ」

「そうでしたか。でも、夏に買うと、すぐにぬるくなるでしょう？　ぬるいサイダーって、とても飲めたものじゃないし。」

冷蔵庫は図書室にないし、だったら冬に買おうって。実は夏から部活動費でサイダーを買う計画をしてたんです」

「ふうん」

垣内君の長期計画を聞きながら、サイダーを半分ほど飲むと、すっかり身体は冷えてしまった。冬のサイダーの威力はすごい、あんなに止まらなかった汗もすっかり引いてしまっている。

「寒いよね」

「確かに」

私達は窓を閉め切って、ストーブをつけた。

石油ストーブが低い音を立てて、ぱつと火がつく。私達はストーブの前に座り込んだ。

「そう言えば、私も夏、図書室で酸っぱい物食べたら涼しくなるなあって考えてたんだよ。でも、ここって飲食禁止でしょう。」

だから c 念したの。なのに、部長がやるとはね」

「そうだったんですか。それはすいませんでした」

垣内君は素直に謝った。

「でも、へ IV。これくらいの違反なんて全然たいしたことないのにね。サイダーなんていつだって飲めるのにすごくおいしく感じる。②妙に貴重に思えるんだ。こういうことが。サイダー飲んだり、朝早くから本の整理をしたり、走ったり、読書したり。もう二度とできないような気がするからかな」

「またできますよ」

「そうかなあ。文芸部はなくなるかもしれないのに？」

「ええ。文芸部はなくなっても、先生は先生なんだから。きっとずっとこんなことがあるはずす」

垣内君が言った。

「だいいね」

私はぬるくなったサイダーをそれでもおいしいと思いつながら飲み干した。

(瀬尾まいこ『図書館の神様』より)

*注 顧問…部活動を指導する先生。

堰を切ったように…たまっていたものがどつとあふれ出す様子。

おもむろに…動作が静かでゆっくりしている様子。

ごねてた…ぐずぐずと文句や不平を言い続けた。

問一、(A) (D) にあてはまる最も適当な語を次の1～4から選び、番号で答えなさい。

- 1、うつかり 2、すんなり 3、こつそり 4、どつぷり

問二、1 a に最も適当な漢字一字をあてはめて、二重傍線部を「完璧だ」という意味にしなさい。

- 2 c に最も適当な漢字一字をあてはめて、二重傍線部を「あきらめる」という意味にしなさい。

問三、~~~~i 「推敲」、iv 「怪訝な」の意味として最も適当な語をそれぞれ次の1～4から選び、番号で答えなさい。

- i 「推敲」 1、激しく意見を交換すること。 2、たくさん人の考えをきくこと。

- 3、文章を何度も考え、作り直すこと。 4、専門家に見てもらうこと。

- iv 「怪訝な」 1、心配そうな様子。 2、楽しむような様子。

- 3、あざ笑うような様子 4、不思議そうな様子。

問四、~~~~ii、iiiについて、ii 「川端」は川端康成、iii 「漱石」は夏目漱石のことであるが、それぞれの作家の作品を次の

1～4から選び、番号で答えなさい。

- 1、「羅生門」 2、「坊っちゃん」 3、「雪国」 4、「舞姫」

問五、b 秩序 の対義語として適当な語を次の1～4から選び、番号で答えなさい。

- 1、筋道 2、安定 3、冷静 4、混乱

問六、——①「天井を見上げたまま吹き出した」とあるが、それはどうしてか。その理由として最も適当なものを次の1～

4から選び、番号で答えなさい。

- 1、自分達のやっていることがくだらなく感じられてむなしくなったから。

- 2、「垣内君」の言っていることがあまりにもおかしくて仕方がなかったから。

- 3、疲れ果ててしまい、自分達がしていることの意味がわからなくなったから。

- 4、「垣内君」と好き勝手に走ったことが気持ちよく、とても楽しかったから。

問七、〈I〉 〈IV〉にあてはまる語として最も適当なものを次の1～4から選び、番号で答えなさい。

- 1、目まぐるしかった 2、ときどきする 3、うらやましく思った 4、いらいらした

問八、——②「妙に貴重に思える」とあるが、「私」のこの気持ちについて次のように説明したとき、1、2に入るのに最も適当なことを指定された字数で本文中から探し、抜き出さない。

唯一の文芸部員の「垣内君」と突然意味もなく走ったり、飲食禁止の1三字でサイダーを飲んだりする何

気ないことが2九字かもしれないので、大切に感じられる。

四、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「わたしのいのち」という言い方を人はよくする。この言い回しの意味するところはなかなかむずかしい。「わたしのいのち」というからには、わたしの服、わたしのかばん、わたしの鉛筆^{えんぴつ}といったふうに、自分の持ち物、つまりは自分の所有物を考えるかもしれない。(ア)、服やかばんや鉛筆のように、いのちはだれかのそれと取り換えることができない。なくしたらまた別のいのちを買うというようなことはできない。とすれば、いのちとは¹それが²ない³とわたしが生きていけないものと言いかえられるだろうか。つまり、わたしに不可欠のもの、つまりわたしにとっていちばん重要な事物もしくは対象だと言えるだろうか。これもまだ不正確だ。(イ)、「いのち」は「わたし」と別物ではないからである。「わたしのいのち」という言葉を口にしてこのわたしそのものが、いのちの一つの現実であるからだ。その意味では、「わたしのいのち」とは生きているこのわたしの存在そのもののことだと言いたくなる。けれども、そのいのちについて、わたしはほとんど知るところがない。からだの内部がどうなっているかを知らないし、いつ病気になるか、いつこの生が終わるのかも自分では分からない。いのちを養うということ、(ウ)食⁴べるということも、勝手に食欲が生まれるのであって、わたしがコントロールしているわけではない。ねむりたいと思ってもすぐにねむれるわけではないし、(エ)「わたし」がねむっている間もわたしのなかでいのちは騒^{さわ}がしいくらいにざわざわと活動している。いのちはその意味でわたしそのものであるには違いないが、わたしが理解

しきれるものではないし、またわたしの思いどおりになるものでもない。いのちとは、だから、自分²が³それでありながら、自分ではどうしようも操作できないものというくらいにしか、まずは言いようのないものだ。が、³それがなくてはわたしがいないということ、このことは確実だ。

(オ)人は、このいのちはわたしのものだとはっきり主張する。そう主張してゆずらない。このいのちを攻撃されたり、ないがしろにされたりするのは、わたしが攻撃され、ないがしろにされることに等しいからである。このいのちをどのように取りあつかうかについては、それはわたし自身のことなのだから、当然、わたしが決める。これがわたしたちの(カ)というものである。個人が(カ)であるとは、個人がその存在、その行動のあり方をみずからの意志で決定できる状態にあるということだ。わたしの身体もわたしのいのちもほかならぬこのわたしのものであって、この身体を本人の同意なしに他から傷つけられたり、その活動を強制されたりすることがあってはならないというのは、「基本的人権」という理念の核^{かく}にある考え方であると言ってよい。

けれども、だからといって、いのち²が³そういう意味でわたしの所有物であるのではない。所有物とは、わたしが意のままにできるもの、自分でその処分を決められるもののことだ。つまり、「わたしの物だからわたしはどうしようと勝手にしよう」という理屈である。自殺の正当化にあたっても、³献^{けん}体^{たい}の登録や臓器の提供にあたっても、その背景にあるのは同じ論理である。生きて死ぬのはほかならぬこの自分であるから死に方は本人が決めることができる、自分の身体は自分のものだから⁴それを⁵どう処分しようと(美容整形しようと、身を⁶注^しひさ⁷ようと、体内の臓器を他人に譲^{じやう}渡^どしようと)他人にとやかく言われる筋^{すじ}合^あいはないというわけだ。

が、ここでもちと立ちどまって考えておかねばならないことがある。自分の自由がかかっているその同じ身体、同じいのちがけっして自分だけのものでないことも、わたしたちは日々痛いほど感じているからだ。人は自分のいのちを自分で創^{つく}りだしたわけではないし、自分のいのちを自分で閉^おじることもできない。だれも自分でへその緒^おを切ることはできないし、自分で

棺桶かんおけの中に入ることもできない。だれしも他人の庇護まひごのもとで育つ。他人にあれやこれやの世話を受けながら老いる。身体やいのちを、さらに広く「身」とか「身柄」というふうにとれば、家族生活を営む人、いろいろな団体の運営責任を負う公的な立場にいる人にとっては、自分の身体を自分だけのものだと感じることのほうがむしろまれだろう。

③ いのちは自分だけのものではないということ、このことは、食や性、育児や介護の場面一つとってもすぐに分かる。いのちはいつも、他の身体との交わりややりとりのなかにあるのであって、いのちの保ち方、いのちの行く末は、そのいのちにさまざまなかたちであずかっている人のものでもあるのだ。だれかが死ぬということは、その人のいのちだけに起こる出来事なのではない。その人に死なれた人びとにとってもそれは重大な出来事なのだ。だから、何十年も前に戦死した人の身柄を、あるいはその人が身につけていた物を、人はいくらかときがたつてもどうしてもこの眼で確認したいと、かつての戦地に赴くおもむ。個人のその身体が死体となったとき、そのいのちをとともに生きた者がそのいのちを亡きものとして認める、そういう行為をもつてやっと一つのいのちは絶える。「死とともに死者が誕生する」と言った人がいるが、その意味もそういうところにある。

いのちのもっとも基礎的な場面で、人はたがいのいのちを深く交えていく。この交感がいのちのなかを流れている。^④からだはだれのものか、いのちはだれのものか。これは、人がだれと生きてきたか、だれとともに生きつつあるかという問いとともに問われねばならない問題なのである。かつて生物学において、生命活動、とくに呼吸が燃焼の比喩ひゆで語りだされたように、生命というと、生きものの内部にあって何か実体のように存在するものと考えられがちである。(A) まるで生命の炎とでもいうべきものがあつて、それがいつかふつと消えるかのように、である。(B) 他人との交換や交感という関係からはなれて、人の暮らしというものは成り立たない。(C) 脇の下やあごの下を洗われ、こぼした乳やもらした便を始末してもらった経験——これを「存在の世話」と呼んでもよい——、あるいは介護や看護で他人にからだをさすってもらったこと、恋人と指先をからませること、性の交感、そしていのちの誕生には母親のすさまじいうめき声や、赤ちゃんの嘔ふきだすような泣き声がともなうこと……。 (D) いのちのもっとも基礎的な場面ではたがいのいのちを深く交えている。この交感が

いのちのなかを流れている。ありふれた言い方になるが、〈生〉も〈死〉もその根っこからして社会的な出来事なのである。さらに食べもの一つ調達ちようたつするのも、寝る場所一つ見つけるのも、社会の大きな機構が働かなくなったら至難しなんのことなのだ。ただ、そのために働いている人の姿がじかに見えないので、お金でその機構のサービスを買って、そうして自活している、自分一人で生きることができていると錯覚しているだけなのだ。

(鷺田清一『いのちへの問い』より)

*注 献体…死後、自分の身体を医学研究用に提供すること。

ひさごう…売ろう。

庇護…かばい守ること。

問一、(ア) (オ) に入れるのに適当なことをそれぞれ次の1～5から選び、番号で答えなさい。

- 1、なぜなら 2、けれども 3、また 4、だから 5、つまり

問二、ア——1～4の「それ」の中で指示する内容が一つ異なるものがあるが、それはどれか。番号で答えなさい。

イ アで選んだものの以外の「それ」が共通して指示する内容を本文中から一語で抜き出しなさい。

問三、——①「ないがしろ」の意味として適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、ないもののように軽く扱うこと。 2、徹底的にいためつけること。
3、見えないようにおおい隠すこと。 4、大切だと分かりながら無視すること。

問四、——②「そういう意味で」はどのような意味でか。次の説明が答えとなるように、（ ）に入れるのに適当な本文中の部分を、——②より前の部分から十三字で抜き出しなさい。

わたしが、「わたしのいのち」について（十三字）という意味で

問五、（カ）には漢字二字のことばが入る。本文中から適当なことばを抜き出しなさい。

問六、——③「いのちは自分だけのものではない」とはどのようなことか、次の中から適当でないものを一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、人は社会的な存在であり、数多くの顔を持っているということ。
- 2、さまざまな人に支えられながら生まれ、死んでいくということ。
- 3、つねに他人との交わりややりとりの中で生きているということ。
- 4、人の死は周囲の人たちにとっても重大なできごとだということ。

問七、次の一文は本文中のどこにあったと考えられるか。適当な位置を（A）（ ）（D）から選び、記号で答えなさい。しかし、生活といえは他人と共同のものである。

問八、——④「からだはだれのものか、いのちはだれのものか」について、筆者はどのように考えているか。次の1～4から最も適当なものを選び、番号で答えなさい。

- 1、からだもいのちも、存在するものでいつの日かふっと消えるものである。

- 2、からだは他人との交わりの中に存在するが、いのちは本人のものである。
- 3、からだもいのちも、自分ひとりだけのものではなく社会的なものである。
- 4、いのちはおたがい支え合うものであるが、からだは公的なものである。

問九、筆者がこの文章を書いた理由は、次のように説明できる。本文中から、空欄に入れるのに適当な二十字以上二十五字以内の部分を探し、最初と最後の三字を抜き出しなさい。

現代人の中に、（ ）人が多くと感じているから。

J
—
1四

受 験 番 号	
氏 名	
得 点	